

翁の物語としての『竹取物語』

——『古典』に親しむために——

竹村 信治

0. 『竹取物語』Ⅱ『かぐや姫』のお話？

『竹取物語』は、古典導入期の定番教材として、おおくの中学校一年生用教科書に採録されている。「みなさんは『かぐや姫』のお話を知っていますね。あの『かぐや姫』の物語の原作が『竹取物語』なのです。だから……」。学習者の読書体験との連携をはかることで古典世界を身近なものと感じさせ、もって『学習指導要領』の注文どおり、「古典」への親しみをいだけせよう、というわけである。こうした『竹取物語』の扱い方は、つぎの発言に代表される教材観、古典観に支えられている。

いつだったか分からない、しかしはるかずっと昔、幼かった日のいつかから、この話は知っている、日本人であればおそろく例外なくこう言える。……その思い出に加えて、なにか非常におおどかで美しい夢と、浄化された感情とが揺曳していることが、誰にも感じられるのではないだろうか。

このようにある民族の魂に深く強く刻みこまれ、しかも時世

を経て清新な魅力と豊かな創造的契機を失わないものを、「古典」と呼ぶならば、『竹取物語』こそ、日本人にとって古典中の古典である。いつどのようにしてか分からないほど、多様な形でこの物語はわれわれの魂の中に入りこんでいる。それほどにも、この物語は、現代においても創造的活性を失っていないといつてよいであろう。」

(新潮日本古典集成・野口元大氏「解説」)

だが、野口氏もこの直後に危惧を表明しているように、「かぐや姫」と『竹取物語』を直結させて「古典」の意義論へと着地する、こうした議論は、「あまりに一面的」だ。「竹の中から生れて、十五夜の月明の中を天に昇ってゆく」かぐや姫の物語には『竹取物語』の「古典作品の実質はとり逃がされてしまつて」おり、両者をイコールで結ぶことは、かえって『竹取物語』さらには「古典」との出会いを阻害し、『竹取物語』など、所詮童幼婦女子のためのお伽噺であつて、文学的内容など大人の読書人にとっては取るに足らず、ただ古いという一点で興味を持てばもてる態の作品だ」といった「俗論」や「大人の常識」を育むことにはなつても、真に『古典』に親し

む態度を育てる”ことにはならない。

「古典」の定義をめぐつての「ある民族の魂に深く強く刻みこまれ」の一項にはさまざまな異論もあろうが（国学的定義・国民文献学流「新国学」的定義への違和、言説論や構築主義的観点の欠如への疑念、羽衣譚・難題譚といった物語類型の諸民族伝承との相同性や「斑竹姑娘」譚との一致に關する無配慮への不審など）、「時世を経て清新な魅力と豊かな創造的契機を失わないもの」との一項に異議をとなえるものはあるまい。とすれば、「竹取物語」授業は、童話絵本の「かぐや姫」のお話への還元ではなく、それとは異なる言語宇宙を構成している一テキストとしてこれを相手取り、この「古典」「竹取物語」が「時世」へた現在においても「清新な魅力と豊かな創造的契機」を発見していく過程を軸に構想されなければならない。「古典に親しむ態度」は、この「清新な魅力と豊かな創造的契機」を発見していく読書体験こそ裏打ちされるものであって、「身近」さを強調するばかりでは身につかない。

1. かぐや姫の親としての竹取の翁の物語

「竹取物語」の授業は、だから、このテキストが「かぐや姫」との近縁性をもつが故に、近縁性から出発してはならない。むしろ、その異なりの確認こそが、授業者の最初の仕事でなければならぬ。でなければ、「清新な魅力と豊かな創造的契機」の発見など望むべくもなく、学習者は、既視感をもって眺めつつ「竹取物語」を非現実的な空想物語として矮小化し、そうした噓としての使用のために知

識化してしまうのがオチだろう。しかも、「古典」世界はその延長線上に像を結び、知的活動としての創造力とは無縁な、あえていえば「文学」趣味的想像力をもって「親しむ」ことを「古典」との向き合い方として学んでしまう。

「竹取物語」と「かぐや姫の物語」との異なりはさまざまあるが、題名の異なりがまずは重要だ。散逸したものも含めた平安期物語のおおぐが話題人物を題名にしていることを勘案するならば、この異なりは物語の話題人物の異なり、したがって物語内容の異なりを端的にしめしている。

もちろん、「竹取物語」が「かぐや姫」の物語として読まれなかったわけではない。周知のとおり、「源氏物語」には「かぐや姫の物語」（蓬生巻）との呼称も見える。さらに、平安期の物語には「かぐや姫」をモデルにしたとおぼしい、いわゆる結婚拒否型女主人公も数おおく見いだされる。また、そうした読み方の伝統がなければ絵本や童話の「かぐや姫」のお話「も生まれなかつたであろう。けれども、この物語は、その冒頭を「今は昔、竹取の翁といふものありけり。」と始めている。また、現存諸伝本のすべてが「竹取翁物語」もしくは「竹取物語」を題としていて、「かぐや姫の物語」とするものがないという事実もある（日本古典文学全集・片桐洋一氏「解説」、一九七二・二二）。「源氏物語」の場合も、蓬生巻の「かぐや姫の物語」は末摘花の教養の地平の古代性を強調する文脈で、「唐守」「親姑射の刀目」「かぐや姫の物語」の絵に画きたるをぞ、時々のまさぐりものにし給ふ。」末摘花の関心のありかを表示しようとして称されたものとおぼしく、絵合巻、冷泉帝御前に捧呈された「竹取物語絵」には「竹

取の翁」の称が与えられている。

「竹取の翁」を題に掲げる「竹取物語」は翁を話題人物とする物語だ。冒頭「野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。」は、よく知られているように、この翁が田畑を所有しない最下層階級に属する人物であったことを表示している。その翁が、かぐや姫を得て「やうやう豊かに」、「勢、猛の者」（いわゆる「致富譚」の主人公）となり、貴公子たちの求婚に門地拡大の夢を、帝の内要請に叙爵の誉れを追うものの、すべてかなわず、やがて姫の昇天の時を迎えて手中の玉を失い絶望する、これが「竹取の翁の物語」の顛末である。後藤祥子氏は、「この物語は、大筋として荒唐無稽を描いているが、登場人物はとてモリアルである」として、翁の像をつぎのように解説している（講談社少年少女古典文学館「竹取物語・伊勢物語」・「解説」、一九九一・一〇）。

貧乏で自分の田畑もなく、竹やぶから竹を取ってきて細工をして生計をたてている、しがない竹職人の翁。そこへ思いがけぬ幸いがころがりこんで、みるみる豊かになり、美しい娘の評判に貴族が出入りするようになると、まるで自分の手柄のように得意になって、縁談をまとめようとやっきになる翁のあつましき。翁は、車持の皇子の話にすっかりひきこまれ、強情な姫をおどしたりすかしたりしてたくせに、皇子の話がうそとわかると、とたんにたぬきねいりをはじめ、にくめない小ずるさもちあわせた、どこにでもいそうな、いかにも俗物的な老人である。帝が位をやるといえば、いうことをきかない姫に業をにやし、姫の心を最後まで理解できないくせに、それなら

死んでしまふといわれると、たちまちべそをかく子どもっぽさや、天人に姫をわたすまいとして思いっきりの悪態をつき、たちまち地がでる庶民性をもっている。

つまり、この物語は翁を、「かぐや姫」のお話」のように善人としてばかり描くのではない、ということだ。たしかに姫を迎えに来た天人は、「汝、幼き人、いささかなる功德を、翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、かた時のほどとて下ししを」と、翁の過去の善行を証言する。けれどもその具体は紹介されず、物語は、姫を得たのちの世欲（致富・官爵）にまどう行状をこそ主題化していて、その間の翁の姿を右の解説のように描き出すのである。天人がさきの言葉につづけて「そこの年ごろ、そこの黄金賜ひて身をかへたるがごとくなりたり。……（姫）罪の限りはてぬればかく迎ふるを、翁は泣き嘆く。あたはぬことなり。はや返ししたてまつれ」と述べるのも、そうした「きたなき所」＝地上の「きたなき」心＝世欲を翁にうかがつてのことであろう。

「あつかましき」「小ずるさ」「俗物的」「子どもっぽさ」「庶民性」。もつとも、翁が姫にそそぐ情愛は物語の全編を通じてかわるところがない。たとえば、貴公子たちの最初の求婚（娘をわれに賜べ。）に「おのが生さぬ子なれば心にも従はずなむある。」と言ひて月日を過ぐす」のは、未だ姫の拒絶する前の翁の拒絶として、父親の心意を表すもの。また、求婚を受け入れるのも「翁のあらむかぎりは、かうてもいすがりなむかし。」の発話によれば、「己なきあとの姫の身を案じてのことらしい。出仕の要請を命を賭して拒絶する姫に「なし給ひそ。わが子を見たてまつらではなにかはせむ」「天下のこと

はとありともかくありとも、御命の危さこそ大きな障りなれば、なほかう、仕うまつるまじきことを、参りて申さむ」と応ずるのも、親としての情愛の深さをよく伝える。したがって、右に指摘された翁の姿態のすべては、情愛と世欲との間で宙づりになっている翁が折々に見せた表情、少々こむずかしくいえば、宙づりの個に立ち上る折々の主体の相貌ということになる。

とまれ、竹取の翁は、「いささかなる功德」によってかぐや姫（＝娘）を得、やがて致富を手にするや、娘への情愛と世欲との間で宙づりになって右往左往する、そうした親＝人として、「竹取物語」には描かれている。翁は単なる善良、誠実の人ではない。「竹取物語」は絵本・童話とはことなり、己が心の欲望（情愛、世欲）に翻弄される親としての翁の姿をこそ語っている。それは、天人羽衣譚の物語類型を襲い、そのモチーフ「人間の心の変わりやすさ、身勝手な欲望」（前掲 後藤氏「解説」）をよく受け継いだもので、かかる「竹取の翁の物語」においては、かぐや姫の存在、言動はそうした親としての翁の姿、ひいては「きたなき所」＝地上に生きる人間なるもののあり様を浮き彫りにしていく、仕掛けのようにみえなくも面白い。

ところで、このようなテキストの物語りは、たとえば「天上の無限性と地上の有限性を前提とした「人の世のはかなさ」「愛のはかなさ」の詠嘆、「人間の根源的な詠嘆」（前掲、片桐氏「解説」といったロマン主義的な共感を読者に引き起こすものとしてもあるようだ。しかし、大切なのはテキストへのこうした共感を語るのではなく（それはいずれの場合も自己の世界像、もしくはテキスト所有のかたちを表

明することではない）、まずはテキストの語りかけるところ、つまり、何をめぐってどう語っているのか（＝世界へのいかなる問いを発し、それにどう応えようとしているか）を、きちんとおさえておくことであろう。発話はいつもの（誰かの）何かについての（誰かへの）応答として行為される（M・パフチン「言葉のジャンル」など）。したがって、発話を聞く、読むとは、それが、（誰が）何について（誰に）どのように応答しようとしたものであるのかを、まずは聞き取り、読みとることとでなければならぬ。「かぐや姫の物語」ではなく、「竹取の翁の物語」としてある『竹取物語』の場合でいえば、これを読むとは、テキストが竹取の翁の描出をおして差し出している、叙上のごとき「親」なるもの、ひいては「人間」なるものの存在性をめぐる問題領域、また、これに「親」なるもの、そして「人間」なるもの「宙づり」、「欲心」、「ゆらぎ」、「変転」の姿態への注視をもって回答している応答の、そのそれぞれをそれとしてまずは解読することだ。こうした確認を経ることのない「読み」からは、結局のところ共感が反感かしか生まれぬ。すなわち、テキストの差し出す問いかけや提示された応答に回答していく「対話」（M・パフチン）の場を開くことができず、したがって、「対話」の創造的意義にかかわる「清新な魅力と豊かな創造的契機」の発見は、ついに期待できない。

さて、かかる「竹取の翁の物語」としてある『竹取物語』は、しかし、導入教材『竹取物語』では、先にも述べたように、「古典に親しむ」目標達成にむけて「かぐや姫の物語」としてあつかわれる。そこでは、かぐや姫の登場、成長、難題による危機脱出、地上の人々との別れ、残された人々の嘆きの筋立てが原文をまじえてたどられ、

『竹取物語』は絵本・童話の「かぐや姫」のお話」と同様の物語になる。そして、みごとに「原作」たることを証していく。翁はといえば、その登場は冒頭と末尾にかぎられ、かぐや姫の発見を喜び、喪失に絶望するさまが示されるばかり。結果、学習者は親としての情愛と欲心との狭間で揺らぐ翁にも、これを通じてテキストが差し出す「親なるもの」「人間なるもの」の存在性への問いかけにも、提示される応答にも出会わず、したがって「親」なるもの（それゆえ

「親子」なるもの）、さらには（地上の有限性を生かされている）人間なるもの」の存在性をめぐる問題領域を、自らの問題として引き受けることもない。「古典に親しむ」との目標達成を「かぐや姫」のお話と「竹取物語」との近縁性をもって安易に果たそうとしたこととの代償は、ずいぶんと大きかったといわれなければならない。

ただ、「かぐや姫の物語」として「竹取物語」を読む場合にも、テキストからの問いかけや応答を読みとる「読みの構え」さえあれば、そこに「対話」が成立しないわけではない（平安期物語に描かれるかぐや姫モデルの女性たちは、「竹取物語」の読者たちによるテキストとの対話、それへの応答として登場しているはずだ。しかし、導入教材にそうした「読みの構え」や「対話」にかかわる指示はなく、すべては非現実的な空想物語の生成に参与した古人の想像力、でなければ、主人公「かぐや姫」を失った人々に焦点をあてた「失われた愛を求めめる物語」（小学館日本古典全集・末尾部分頭注）の浪漫性を賛美する言説に回収されておわる。どうも問題は、「竹取物語」の導入教材としての扱い方、「かぐや姫」のお話」と「竹取物語」との異なりへの目配りといったこと以前に、われわれがなすできた「読みの構え」

をめぐる慣習（＝作者の想像力への還元）、さらには読みの志向（嗜好）性（＝ロマン主義）といったことにもありそうだ。それは教科書だけの問題では、もちろんない。

2. 〈すき心〉ある竹取の翁の物語

「かぐや姫を主人公とするこの物語が『竹取の翁の物語』とか『竹取の物語』と呼ばれているところに、じつはこの物語の謎が秘められているのである。」と述べた片桐洋一氏（前掲「解説」）は、その謎解きの回路に『万葉集』巻十六・三七九一番長歌の詞書（春、竹取の翁が丘に登って、たまたま九人の仙女に会い、不審尋問を受ける身となつたが、和歌をもって贖済すべく長歌を詠んだというのであるが、その長歌の内容は、要するに、今は老い衰えた老翁ながら、若かりし時には多くのすばらしい女たちの関心を集めたこともあるとの、いわば「我も昔は勇山」式の「翁の語り」である。）を持ち込み、つぎのような想定をしている。

この『万葉集』長歌の成立以前に、竹取の翁なる人物が若かりしころの華やかな恋愛を語つたり、仙女と交渉を持つたりしても不思議でないような背景・説話がすでにあったとすべきである。／『竹取の翁の物語』の竹取の翁という名が、そのような重荷をになうものであったとすると、……致富説話的要素や……翁の年齢に関するいちじるしい矛盾、そしてさらには『丹後風土記逸文』に見える比治真名井の話、『帝王編年記』に存する伊香小江の説話、あるいは、各地に今も伝えられているという天人女房説話・鶴女房説話の類などの存在を考えあわせ

るとき、翁自身がかくや姫の配偶者であったというような「竹取翁原話」の存在も、あながち、かつてな想像とばかりかたづけしてしまえないものがあるのである。

すなわち、『竹取（翁）物語』の題名の由来を、「翁自身がかくや姫の配偶者であったというような『竹取翁原話』の存在」をもって考えようというわけだ。この着想は魅力的だ。「竹取翁原話」の实在如何はともかく、この物語の翁には、『万葉集』の「竹取翁」の場合と同様の、かつて色好みであった老い人の（へすき心）が、あちこちに見いだせる。

翁、竹を取る事久しくなりぬ。いきほひ猛の者に成りにけり。この子いと大きに成りぬれば、名を三室戸齋部の秋田を呼びて付けさす。秋田、なよ竹のかぐや姫と付けつ。この程三日うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけさらはず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。

『竹取物語』冒頭部分、裳着をすませた姫の命名の儀（求婚受付開始宣言）がおこなわれたくだりである。「男はうけさらはず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ」の場面は、『源氏物語』玉鬘物語諸巻での光源氏を想起させ、ここにかがえる翁の興奮ぶりも、玉鬘発見の報をえて「すき者どもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなさん」と語る光源氏、また玉鬘一見の後、紫上に、

さる山がつの中に年経たれば、いかにいとほしげならんと侮づりしを、かへりて心はづかしきまでなん見ゆる。かかものありと、いかで人に知らせて、兵部卿宮などの、このまがきの内好ましうし給ふ心、乱りにしかな。すき者どもものいとうるは

しだちてのみこのわたりに見ゆるも、かかるもののくさはひのなき程なり。いたうもてなしてしかな。なほうちあはぬ人の気色、見あつめん。

と語る光源氏を髣髴させる（玉鬘巻）。翁と光源氏の両者には、実娘ならぬ女性を手に入れ、権勢（政治的立場・致富）の担保とするためにその結婚を差配するといった点に共通性が指摘できるわけだが、光源氏のこのことばに色好みらしい（へすき心）をうかがうならば（たとえ玉鬘が右近に連れてこられたそもそも段階から、源氏は玉鬘について、いわゆる好き心を発動させていますでしょう。）（『国文学』一九八七・一一、「共同討議：玉鬘十帖を読む」での秋山度氏の発言）、翁のかかる興奮ぶりにも、かくや姫を「すき者どもの心尽くさするくさはひ」たらしめんとする（へすき心）を見てとってよいのだろう。さらに、そのような光源氏が玉鬘物語においてはしきりに自らの「老い」に言及する（これについては右の「共同討議：玉鬘十帖を読む」で後藤祥子氏が指摘している）ところにも着目するならば、この（へすき心）は『万葉集』の「竹取翁」以来の、かつて色好みであった老い人にきざす（へすき心）、すなわち「老い人の（へすき心）」と称しうるものでもあつて、『竹取物語』の竹取の翁のそれにびつたりとかさなっていることがわかる。

竹取の翁は、こうして玉鬘物語の光源氏どうよう、老い人のすき心をもつて実娘ならぬかくや姫の結婚に介入する。さすがに光源氏のようにみずから求愛者の一人として参加することはない。しかし、「蓬萊の玉の枝」をもち来たつたくらもちの皇子のために「聞の内、しつらひなど」したり、狩行幸に託けての帝のかいま見を手

引きしたりするこの翁に、兵部卿宮のために蜚を放つたり、実子冷泉院のもとへの出仕を考えたりする光源氏と同じ、抑圧された欲望を見てとることは可能だろう。翁は、この抑圧された欲望を発散、解放させるべく、貴公子、帝の求愛を補助しつづけているかのごくなのであり、その意味では、翁の「へすき心」行使を代替させるかたちで、貴公子、帝の求愛行動が語られているともいえそうだ。

ところで、このようにして翁の「へすき心」を代行するかにみえる貴公子たちについて、その登場はつぎのように語られている。

世界の男、貴なるも賤しきも、いかでこのかぐや姫を得てし
がな、見てしがなと、音に聞きめてで、まどふ。そのあたりの
塙にも、家の門にも、居る人だにたはやすく見るまじきものを、
夜は安きいも寝ず、闇の夜に出でて、穴をくじり、かいはみま
どひあへり。さる時よりなむ、よばひとは言ひける。

人のものともせぬ所にまどひありけども、なにの験あるべく
も見えず。家の人どもにものをだに言はんとて、言ひかかれど
もこととせせず。あたりを離れぬ君達、夜をあかし日をくらす、
多かり。

疎かなる人は、「ようなきありきは、よしなかりけり」とて、
来ずなりにけり。その中になほ言ひけるは、色好みといはるる
かぎり五人、思ひやむ時なく夜昼来ける、その名ども、石作の
皇子・くらもちの皇子・右大臣阿倍の御主人・大納言大伴の御
行・中納言石上の麿足、この人々なりけり。世中に多かる人な
だに、すこしもかたちよしと聞きては見まほしうする人どもな
りければ、かぐや姫を見まほしうて物も食はず思ひつつ、かの

家に行きてたはずみありきけれど、かひあるべくもあらず。文
を書きてやれど、返事せず。わび歌など書きておこすれども、
かひなしと思へど、霜月師走の降り凍り、水無月の照りはたた
くにも障らず来たり。

そして、この後の貴公子求愛の物語（いわゆる難題譚）をへて、やが
て帝も、上引の求愛者たちの行動（音に聞きめてで）「すこしもかたち
よしと聞きては見まほしうする」↓「家の人どもにものをだに言はんとて言
ひかかす」↓「人のものともせぬ所にまどひありく」「かの家に行きてたはず
みありき」↓「わび歌など書きておこす」をなぞりなおす振る舞い（「か
ぐや姫、容貌の世に似ずめでたきことを、帝聞こしめして」↓「房子、承り
て（竹取の家に）まかれり」（帝、翁に）「汝が持ちて侍るかぐや姫たてまつ
れ」↓「帝、にはかに目を定めて、御狩に出で給うて、かぐや姫の家に入り
給ふ」↓「帰るさの」歌詠）をもつて、「求愛の物語」に参入していく
ことになる。この行状のなぞりなおしは、帝が貴公子どうようの
「色好み」、ひいては翁の「へすき心」の代行者として語られようと
していることを伝えていよう。

こうして「竹取物語」は、潜在化した翁のそれをも含め、かぐや
姫をめぐる男たちの「へすき心」とその求愛行動を語る。もちろん、
この物語についてなされる、伝承話型「羽衣説話」「難題譚」の要
素を重視した伝奇物語としての把握、求婚して失敗し道徳的形象性
をまとう貴公子たちの名が天武・持統兩朝の実在人物に一部かさな
るところに着目し、そこに物語のリアリティをみとめ貴族社会への
批評を読みとる理解も、それはそれでありうることだ。けれども、
ともあれテキストが第一義的に語っているのが、「色好み」たちの

「へすき心」と求愛の物語であること、あるいは、玉鬘物語に「竹取物語」とのアナロジカルな関係がしくまれ、それが見とおされることが予定されているらしい点から見、平安中期の読者たちにならぬような物語として「竹取」が読まれることのあつたことについては、異論のないところであらう（かかるとる男たちを「源氏」は「すき者」とよび「竹取」は「色好み」と称する。両者の位相差はそれとして考えられなければならぬが、ここでは措く。ただし、「色好み」の一人、大伴御行の「この人々とも帰るまで、齋ひをして我はをらん。この玉取り得では、家に帰り来な」との命をうけた者たちは、「かゝるすき事をしたまふこと」と「そしり」あつたとある。その評言によれば、両者の近縁性はうたがいようもない）。

さて、問題は、しかしテキストが話題として語る「色好み」たちの「へすき心」と求愛の物語“自体にはない。むしろ、「竹取物語」の表現をうかがう上では、その「色好み」たちの「へすき心」と求愛の物語”がテキストでどのように語られているかのほうが重要だ。ただし、これについては求愛者たちのすべてが失敗している物語展開に、すでに明らかだろう。テキストは、その求愛の失敗を語ることで翁を含めた「色好み」の「へすき心」を批評しているというわけだ。テキストのこの批評性は、物語展開だけでなく、叙述の各所にも見いだすことができる。たとえば、大伴御行の「色好み」の所行を「すき事」と「そしりあへ」る「家にありとある人」は、「龍の頸の玉とり得ずは帰り来な」との命にあれこれ試みるが「事ゆかぬもの」故、さらに「親・君と申すとも、かくつきなきことを仰せ給ふこと」と「大納言をそしりあひたり」という。物語中の人々のふるまひは、

語り手だけでなく登場人物によつても批評される。テキストの言語主体（いわゆる作者）は、それらを通じて読書の言語過程に介入し、読者の言語行為（読み）を方向づけようとするが、ここでのそれは、語りつつある「色好み」たちの「へすき心」と求愛の物語”が相対化される局面を創り出そうとしたものとしての意義をになつていよう。ただし、振り返ってみれば、この相対化の局面の創出は、さき狂ぶりの素描のうちに、すでに果たされていたことでもあつた。パロディは誰の目にも明瞭な型どりを前提とするが、この、「世界の男」たちの熱狂ぶりの素描（それらはいずれも後のテキストに「へすき心」者の行動を描きたす際の言表の型として踏襲される。先に引用した光源氏の紫上への発話中にもそれは確認できる）はその類い。翁が五人の貴公子を自邸に呼び寄せたくだりの、

日暮るるほど、例集まりぬ。あるは笛を吹き、あるは歌をうたひ、あるは唱歌をし、あるはうそぶき、扇鳴らしなどするに、翁、出でていはく、

もその一例だろう。このテキストは、「色好み」たちの「へすき心」と求愛の物語”を相対化の眼差しを組み込みつつ語りはじめ、その冒頭からいわばパロディとして差し出しているという次第なのである。

「色好み」たちの「へすき心」と求愛の物語”のパロディとしての「竹取物語」。それが問いかけているのは、いうまでもなく「色好み」の「へすき心」、あるいは志向すべき価値像としてこれを共有する人々（老人、貴公子、帝……「世界の男」の様態。そしてテキストは、「色

「好み」の「へすき心」を共有する「世界」に共同性をその共同性の言説のパロディ的使用をもって描き出し、「色好み」の嗚呼を語りこれを笑いのめしてみせることで、問いかけにノーと応じているわけなのである。

「竹取物語」を「竹取の翁の物語」とみなし、その竹取の翁に「万葉集」「竹取翁」以来の「(若い人の)すき心」の伝流を見とおすことで見あらされるこのテキストの表現とは、右のようなことである。同時代の物語テキスト「伊勢物語」との位相差が思われるところが、その両者がほぼ同期に生成したこと、また、平安朝を通じてともにおおくの読者を獲得していたことに思いを致すことが必要だろう(ただし中世に「竹取物語」の享受を確認したいことについて、前掲片桐氏「解説」、河添房江氏「竹取物語の享受」(『国文学』一九八五・七)、同「竹取物語 享受」(『竹取物語伊勢物語必携』一九八八・五)、「源氏物語の王権と嘘」一九九二・一一)に指摘がある)。「伊勢物語」を産む一方で「竹取物語」をも産出する時代の言説状況にあつて、人はその状況とどう向き合つて言葉を生じていたのだろう。また、「伊勢物語」の「昔男」を享受する一方で「竹取物語」のパロディをも目にした読者たちは、そのなかで「色好み」の「へすき心」へのどのような眼差しを形成していくことになるのだろう

3. 竹取の翁の物語が語る、ありうべき存在の かたち——親と子、男と女

「へすき心」を志向する共同体の言説のパロディ的使用をもって「色好み」の嗚呼を語り、これを笑いのめしてみせる「竹取(翁)物語」

は、しかしそこでおわるのではなく、周知のとおり、以下に、貴公子たちの「色好み」の嗚呼、帝の好色、翁の「(若い人)すき心」をあばきだし拒絶したかぐや姫と拒絶された彼らとの心の融和を語っていく。貴公子たちとのそれは、帝の入内要請をめぐる翁との応酬のさなかでの、つぎのかぐや姫の発言にうかがえる。

なほ虚言かと、(宮中三)仕うまつらせて、死なずやあると見給へ。あまたの人の心ざしおろかならざりしを、むなしくなしてこそあれ。昨日、今日、帝のたまはむことにつかむ、人聞きやさし。

入内拒否の口実とも見られ、また貴公子たちの側からの発言がないので、曖昧な点をのこすことになるが、表面上であれ、すべてが終わった後に貴公子たちの愛情の深さをそれとして受け入れるかぐや姫の様子は、ここにひとまず確かめられる。また、帝との心の融和は、これも求愛の一件が不首尾におわつたあと、

……帰らせ給ひぬ。……かぐや姫のみ御心にかかりて、ただ独り住みし給ふ。よしなく御方々にも渡り給はず。かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はせ給ふ。御返り、さすがに憎からず聞こえ交はし給ひて、おもしろく、木草につけても御歌を詠みてつかはす。かやうにて、御心を互ひに慰め給ふほどに、三年ばかりありて、

と語られ、その性愛なき交誼は物語の最後までつづく。さらに、翁とかぐや姫とのそれは、姫が中秋の別れを予告した場面での翁の言葉、

こは、なんでふことのためふぞ。竹の中より見つけきこえた

りしかど、菜種の大きさはせしを、わが丈立ち並ぶまで養ひたてまつりたるわが子を、何人か迎へきこえむ。まさに許さむや。

また、それへの姫の返事、

月の都の人にて父母あり。片時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かくこの国には、あまたの年を経ぬるになむありける。かの国の父母のことも覚え、ここには、かく久しく遊び聞こえて、慣らひたてまつれり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみある。されど、おのが心ならず、まかりなむとする。にあさらかだろ。翁の発話に世敬、へすき心の影はすでになく、あるのは養い子を「わが子」と呼ぶ親の情愛だけだ。かくや姫の発話も同様で、そこには翁への警戒心は微塵もなく、あるのは実の父母に対する以上に深い、養父母への情愛だ。

こうした物語のあり様について、後藤祥子氏はつぎのように評している（前掲、「解説」）。

古代の天皇の絶大な権力を、目の前で「きと影になる」こと
で骨抜きにしてしまい、しかるのち対等で優美なまじわりがは
じまる夢の世界を、どうして創造しえたのだろう。わたしたち
はそこに、権力にあらがえずに泣いたり命を落としたりした、
たくさんの女性たちの悲しみを思い合わずにはいられない。
それにしても、人間の愚かしさを知りつくしたはずのかぐや姫
の口を通して、昇天をいそがせる迎えの者にきつぱりと、「情の
ないことをおっしゃいますな（引用者、補「もの知らぬことなた
まひそ）」といわせている作者は、どれほど深く人を愛し、自

由で豊かな人間観をもった人だったろうか。

これは「かくや姫の物語」としての『竹取物語』理解にすこし傾いたものだが、帝とかぐや姫の関係についての評として、同氏は、玉鬘物語の源氏・玉鬘との関係の「竹取物語取り」を指摘する文脈で、つぎのように述べてもいる（前掲、「共同討論・玉鬘十帖を読む」での報告）。

ところで、源氏が訴える恋情とは一体何なのか。親権者と懸想人のほさまを往復して行き着いた境地は、周囲が憶測している妻妾的あり方とはかなり違っているらしく、玉鬘自身は誰よりも早く、源氏のこの奇妙な求愛の性質をかぎあてています。玉鬘論でよく引かれる部分ですが、「常夏」巻にこんな文章が出てきます。

姫君も、はじめこそむくつけくうたてとも思ひたまひしか、かくてもなだらかにうしろめたき御心はあらざりけりと、やうやう目馴れて、いとしも疎みきこえたまはず

こうした源氏と玉鬘との関係は竹取における姫と帝との潔い間柄とはやや異質であるにしても、女が「うとみきこえず」としているのは注意すべきだと思われまます。安住すべきではない土地に身を置きながら、いつしか憎からぬ人間関係を結び、しかもそれが、現世的な夫婦関係や愛欲とはいささか次元の違うところできつぱり結ばれている、六条院の「この世のものならなさ」の本質は、そういうところで竹取と繋がって来るのではないか。実は最近拝見した高橋和夫氏の玉鬘論（源氏物語の探究「十二輯」で、斎藤暁子氏の論（同「八輯」）の、特にそこを絶賛してらして、あらためて、はつと思つたのですが、一見あやうそうに見

えて、その実、潔さを実証することのできたこの二人の關係と
いうものは、俗物の世界から見るとまことに稀有だとい
うので、そんな価値観を実感できたのは、源氏の前にはこの竹取
の帝だけではないか。もとより、竹取のほうでは女主人公が異
界の価値観で強引に押し通しているところを、この物語では源
氏が大いに迷い悩みながらやり抜いたといえるものですけれど
も、ともあれ、その超俗性において源氏は竹取を承けているの
ではないか。

この報告をうけた共同討議では、つぎのように右の指摘が深められ
ている。

秋山（虔）「国文学」61年11月号の「物語を読む」という特集
で高橋亨君が竹取物語について書いていますが、かぐや姫の命
がけの抵抗は制度とか国家権力を拒否することでかえって帝と
対等の恋愛關係を獲得した、そこに竹取の恋愛小説の本質があ
る、というような言い方をしておられたけれど、結局、源氏と
玉鬘が結び合わないことよつて稀有の愛情關係をそこで獲得
したと。つまり実現しないことにおいて二人の關係が全く麗し
い恋愛關係になつたと考えていいんだらうか。

後藤 プラトニクをそれ自体意図して価値を認めるというこ
とですね。

秋山 そう。だから、鬚黒と結婚したあとの玉鬘によつてかつ
ての光源氏との關係がまったくすばらしいものとして回想され
ますね。源氏の側からも玉鬘との關係がなつかしく回想される
結ばれてしまつたら地獄であるにちがいないのですが、そんな

らなかつたことにおいて二人のうるわしい關係が出来あがつて
いるということ、そうすると竹取とのみごとな相似形が出て
くるんじゃないでしょうか。

三田村（雅子） そういうかたちで竹取を愛奏したのは、実は宇
津保なんですね。宇津保の初秋の巻の帝（朱雀院）と仲忠の母
との關係は、実際には結ばれることはできないんだけれど心情
的に共鳴し合っている、だけれど結ばれない、というところで
竹取を引用しているんです。その意味では竹取の影響はすく
あると思うんですけど、ある程度宇津保を中に入れた愛奏だ
という感じがしますね。

委細をつくした議論に立ち入る隙は残されていないようだが、この
「実現しないことにおいて」成立する「麗しい」「關係」は、さきに見た、
恋愛事件がおわつた後において五人の貴公子に向けられるか
ぐや姫の彼らへの氣遣い、あるいは、翁についても、へすき心）や
世欲をもつて貴公子たちや帝の求愛を先導する、そうした出来事が
すべて実現せずに終わった後に、かぐや姫との親子の情愛がとり結
ばれたとしているところにも、指摘できることであらう。

ところで、ここでも、問題はもちろん、このような形で登場人物
たちの融和を描き出すテキストが、それを通して何を問ひかけ、考
え、語りかけようとしているのかにある。差し出されているのは、
いうまでもなく、人と人との關係（男女・親子）のとり結ばれ方をめ
ぐる問題領域。テキストはそれに、へすき心）Ⅱ性愛への欲望からは
なれたところで成立する男女の情愛、（「若い人の」すき心）や世欲を
脱したところで生まれる親子の情愛といった、それぞれの情愛の望

まじぎ、そしてこの情愛の、幽明相隔てて無化される（衣着せつる人は心異になるなりといふ）関係の一回性に局限されているがゆえのかけがえのなさを語ることで応えようとする。こうした問いかけと応答は、結局のところ、さきに述べた「人間の存在性」への問いかけ、これに応ずるに「宙づり」「欲心」「ゆらぎ」「変転」をもって「世界内存在」する「現存在」（ハイデガー）あり様を示す回答に包摂されていく性質のものだが、有限の生を運命づけられ「宙づり」「欲心」「ゆらぎ」「変転」からまぬかれること能わざる人間（＝有情）にとつてのありうべき存在のかたちを提示した応答として、「竹取物語」の表現はここにきわまるといつてよい。

提示される情愛のあり様は、それぞれ「異界の価値観で強引に押し通している」「女主人公」かぐや姫の言動をもつて実現したことが、地上の人々と情愛で結ばれることでのかぐや姫（もの知らぬことなたまひそ）と天人を叱責するかぐや姫は天上の人ではない。テキストは、かぐや姫をも含めた地上に生きる人々の間でとり結ばれる関係、ひいては人間の存在のかたちをこそ問い、考え、語りかけようとしているのである。その意味で、このテキストは天上の人「かぐや姫」を主人公とする物語を語ってはいない。地上を指さす「きたなき所」がかぐや姫の降下した竹取の翁の住処の称でもあってみれば、翁は地上の人々を象徴的に表象する存在としてあるともいいえよう。「きたなき所」＝地上に有限の生をさがされる人間なるもの存在性を問い、考え、語りかけるテキストが題名を「竹取翁物語」とするのも故なしとしない。

4. おわりに——「古典」に親しむために

以上、絵本・童話「かぐや姫」と「竹取物語」との近縁性を強調しつつ「古典」との出会いを用意することのあやうさを指摘し、その臍帯を切つて「竹取物語」と直に向き合い、このテキストの「清新な魅力と豊かな創造的契機」を現在において発見していくことの必要性を論じ、そうした立ち位置から「竹取物語」の表現を分析した。それによれば、この物語は、「かぐや姫の物語」ではなく「竹取の翁の物語」として「人間の存在性」を問い、欲心（世欲、情愛）とそこに端を発する「ゆらぎ」「変転」のなかで「宙づり」になっている人間なるものの姿をかぐや姫の親たる竹取の翁のあり様に描き出し、さらに、「へすき心」を共有する「色好み」の行状を翁、貴公子、帝に振る舞わせて笑いのめすなかで、有限の生を生きる人間のありうべき存在のかたちを親子関係、男女関係それぞれの情愛のあり方において提示したものと認められる。冒頭に確認した「古典」の意義、すなわち「時世をへて清新な魅力と豊かな創造的契機を失わないもの」は、「竹取物語」の場合、この「人間の存在性」といった本質的な問いかけ、その問いかけへの真摯な応答のあり方において、すでに確約されていると評しえよう。

ただし、その意義が学習者（＝現代のわれわれ）のものでもあるためには、テキストの「清新な魅力と豊かな創造的契機」が学習者（＝われわれ）の現在において発見されなければならない。そしてその発見のためには、テキストの問いかけを引き受け、テキストの提

示する応答を正確に理解した上でこれと対話し、応答していく場面が用意されなければならない。自分たちは「人間の存在性」をどう考えるのか、テキストの描き出す人間たちの姿はわれわれとは無関係のものか、われわれは「宙づり」ではないのか、「色好み」の「へすき心」を主体化する「言説をなぞりつつ生きる」とはわれわれの場合でいえばどのように生きることなのか、われわれは有限の生を運命づけられた存在として自らの存在を考えているのか、そうした人間の存在性を考える時のありうべき人間関係（親と子、男と女）をわれわれはどう考えるのか、テキストの提示する関係は成り立ちうるのか、それは日々の暮らしの中で他者とどう関わり合うことなのか……。「竹取物語」を含めいわゆる「古典」なるものに「清新な魅力と豊かな創造的契機」が発見される局面は、このような、学習者（「われわれ」）が「古典」テキストの問いかけに応じ、自らの現在をかけた、提示される応答と対話し応答する舞台の外にはない。この発見のためにはもちろん、テキスト自体が学習者（「われわれ」）の対話・応答の意欲を生み出していくような問いかけと応答をもちあわせていなければならないが（これは「古典」かきらない）、古典に親しむとは、結局のところ、こうした体験の積みかさねのなかで、対話と応答を通じて「清新な魅力と豊かな創造的契機」を発見しうるものと認めて「古典」を身近にしているとといった事態をいうのであろう。とすれば、「古典」の教室は、そうした事態を学習者のものとするために、テキストとの対話と応答を通じてそこに「清新な魅力と豊かな創造的契機」を発見する、そのような体験をつみかさねていく場として構想されなければならない。

さて、「竹取の翁の物語」たる『竹取物語』の語るところを上述のごとく考えるとき、その全体を対話、応答の相手とすることは、もちろん「古典」入門期の学習者にとって容易ではあるまい。へすき心への批評（2節）は古典テキスト世界に流通している「へすき心」言説を知ってからでなければ意義の了解がむずかしいし、テキストが提示する望ましかるべき親子、男女の情愛関係（3節）は、『源氏物語』の世界と引き比べることでより深めることのできる課題であらう。ただし、1節で示した、「親」なるもの、「人間なるもの」の存在性への問い、これに翁の「宙づり」「欲心」「ゆらぎ」「変転」の姿態への注視をもつてする回答は、「親」なるものを相対化しはじめ、「第二の誕生」「自我の再編」期に「生命と生き方への根源的な問い」（田中孝彦氏「今日の中学生の知的欲求」『教育』一九九二）を問いはじめた学習者の現在にみあうものとしてあり、引いておいた「少年少女古典文学館」の後藤氏「解題」などを足がかりすれば、相手取ることが可能であらう。とすれば、たとえば、1節にとりあげた範囲を入門期に、2節のそれは「伊勢物語」を扱う折に、また3節にかかわる対話や応答は『源氏物語』世界に踏み込んだ後にと、中等教育の「古典」教室の諸段階に振り分けていくといったことも考えられてよい。小論が試みたように、三者は一連なりのものであり、その意味で、この振り分けと段階化に「竹取物語」の読み深めを仕組むこともできるはずだ。けれども、こうした扱いは、そのいずれの場合も、入門期に「竹取物語」を「かぐや姫」のお話」と関係づけて「かぐや姫の物語」と規定してしまっただけには、むずかしいことにならう。そこでは、「天人羽衣説話」に還元しての空想

物語^{モノリ}、「難題譚」に注目させてのエンターテインメント小説、あるいは見ぬ世の世界の社会批評小説といったかたちで「竹取物語」を所有させて、読書をとじる／読書がとじられるほかはない。そうした読書は「古典」世界が特殊化される局面、あるいは文学ジャンル名をもつてする名付けによって「古典」が「現代」に回収されていく局面でもあるが、この特殊化、回収（飼い慣らし）によって対話や応答のための接点はかき消され、これに媒介されて成り立つはずの、「古典」と現代との「対話」的関係（パフチン）への回路も断ち切られていく。

ところで、「竹取の翁の物語」として「竹取物語」を読み深める読書のはじめには、このテキストの「古典」世界での受容、つまり、「古典」世界の読者と「竹取物語」との「対話、応答」を参照することで、自らの読書過程における対話、応答を振り返るのがふさわしかろうが、残念ながらすでに紙幅が過ぎた。「伊勢物語」の読者でもあったはずの「竹取物語」の読者は相反する言説とのいかなる「対話」をへて「人間の存在性」をめぐる問いへのどのような答案を書いたのか、それら男性作家の手になったとおぼしいテキストの読者（女性たちはそこでのような「対話」を行い何を語り始めるのか、等々、興味はつきないが、すべてはまたの機会に考えることとしたい。

※ 本文引用は新日本古典文学全集によったが、一部、表記等あらためたところがある。

注1 前掲、「共同討議・主鬘十帖を読む」で、三田村雅子氏はつぎのように述べている。

竹取の研究だと、翁がもともとは求婚者だったんじゃないか、という考え方がありますがね、そういうことも重ね合わせてみると面白いんじゃないでしょうか。つまり養い親でありながら、実は求婚者であるという、そういう二重性みたいなもの。竹取物語自体が潜在的に持っているけれど、竹取の段階でそれほど表面化しなかった問題を、源氏物語が新たに解釈し直して位置づけるような竹取物語取りを書いているという……

注2

このような、一たび幽明相隔てた後には永遠に互いを識別できないとするとならえ方は、「源氏物語」夕霧巻、死を意識した一条御息所の愛娘落葉宮への言葉に、

この二三日ばかり見たてまつらざりけるほどの、年月の心地するも、かつはいとはかなくなむ。後、かならずしも対面のはべるべきにもはべらざり。また、めぐり参るとも、かひやははべるべき。思へば、ただ時の間に隔たりぬべき世の中を、あながちならひはべりにけるも悔しきまでなむ。

として見える。

(広島大学)